天路の旅人

粕谷　隆夫

もう、終りにしたい。結論に達したからではない。私は宣長論を、彼の遺言状から始めたが、このやうに書いて来ると、又、其処へ戻る他ないといふ思ひが頻りだからだ。ここまで読んで貰へた読者には、もう一ぺん、此の、彼の最後の自問自答が、（機会があれば、全文が）、読んで欲しい、その用意はした、とさへ、言ひたいやうに思はれる。

（本居宣長・小林秀雄）

沢木耕太郎の『天路の旅人』は二十五年の歳月をかけて完成したノンフィクション作品です。第二次世界大戦末期に密偵としてチベット仏教（ラマ教）のモンゴル人の僧侶になりすまし、内モンゴルからチベットを経てインドまで、戦後を含め、足かけ八年もの間、旅をつづけた西川一三（かずみ・一九一八～二〇〇八）という人物の足跡を描いています。今から七〇年以上も前の話です。砂漠やヒマラヤの高山の厳しい自然、托鉢でやっと命をつないだり、追い剥ぎとの闘いがあったりと、危機が何度も襲う。そして「どこに行き、どのように暮らそうとも、生きていける自信」をつかむ。大自然の大気の中、「自分なりの聖なる時間・空間への思考が深まっていく」。

世に〈仏〉なるものがあるとすれば、それはごく普通に生きている庶民のうちにあるのだというある種の覚醒に達する。帰国してからは結婚し、岩手山の麓の盛岡で暮らし、正月以外休みのない美容・理容の備品を卸す仕事を晩年まで淡々とこなす。午前九時から午後五時まで。そのあと行きつけの居酒屋できっちり二合の日本酒を呑み帰宅する。庶民として普通に生きることを選んだ。沢木耕太郎が西川に興味を持ったのも、旅そのものというより、帰国してからの日々を含め、没するまでのその人生だったかもしれません。

沢木はこの作品が自分の最後の作品になっても満足だと言う。彼は昭和二十四年生まれ。私と同世代と言えます。書庫から彼の本を出すと「あれ、随分とあるな」と独り言。読み直すと、「あれ、俺は何を読んでいたのか」と思います。やは

り友人、知人が欠けていく。「あいつも簡単に黄泉の国へ行っちまった。当たり前のことか」。

人との出会い。一定の時間の経過と、自分の中での反芻による距離の置き方が大切と彼は言う。

『秘境西域八年の潜行』という三〇〇〇枚を超える自らの旅を西川は記しているが、地を這うようにして人々のあいだを歩く。同じ言葉を話し、同じ物を食べ、同じ苦しみを味わう。盛岡で家庭をもち、美しい岩手山を背景に「日々満たされる人としての在り方」（単純の繰り返し）を保ち味わう。やはり〈人生の達人〉と言えるのですか？